

いつか誰ども雪ぐらん 合「怨みに酬ふ仕返しを、杖に言はッか、忍ばうか、エエ何  
 としよう 合「仇に仇せず恩みで返す神の道、うしなはずんば達徳の、仁義を護る國  
 の徳 本調子「民のつとめの貢は潔き、骨と血を 合「献げて堅き君の楯、國の防ぎ  
 に腕鳴す、しよんがエ 合「否む族は、いたづらものよ、置きなんせ 合「亞細亞氣  
 にする亞米利加の、讀めぬ氣象のうさんらし、しよんがエ、放念すな 合「油斷見澄  
 す飛行機の、いざ襲來といふ時に、牢き備への要害を 合「殊更築け民の心に。  
 註に曰く、近時軍事教育を非議するものあり、彼等は軍事を以て「人殺し事業」と  
 放言し、學校は人を救ふことを教ふべくして人を殺すことを教ふべからずなど漫言  
 す、痴歎の甚しき軍事の世を護り人を救ふ眞術なるを知らず、叨りに猶太禍の術  
 中に陥りて、祖國の大鈞を咒ふ、その邪憎むべく、その罪憐むべし、依て「國  
 防」一篇をものして特に絃教を垂る。(大正十四年十二月)

### 模範國民として義家を憶ふ

(大正十四年四月十九日勿來開碑式に於ける山上大演説)

本日はこの勿來の遺跡顯彰の式典につきまして、内務、文部兩大臣の祝辭も戴きま  
 した。又本縣知事閣下よりも懇篤なる祝辭の御朗讀を賜はりました。自分はこの事業  
 の願主としてはなほだ感謝に堪へないのであります。尙ほ又この史蹟顯彰につきまし  
 ては、特に當地方の人々の偉大なる助力によりまして、この荒寥を極めたる遺蹟もた  
 ちまち間の間に或は道路をひらき、或はこの園地を整理し、樹を植ゑ、又は大石を運ぶ  
 等のことをば、多數の人が参加せられて、快くこの仕事をば短時日の間に爲し遂げ  
 まして、恰も今日はこの晴朗なる天氣のもとに、斯く殆ど數萬の群衆がともに相よる  
 こんでこの史蹟をさかんにしたことは、當地の一大名勝としての發展上有利なるの

みならず、國家の歴史の上に於いて、後世子々孫々にこの國史の美を顯揚しなければならぬといふ意義を徹底することに於いて、はなはだ宜しきを得たものと満足に堪へない次第であります。

今日はこの山の上で話をするのでありますから、細かい話はとても出来ません、且つ非常な群衆でもあります。私は數日來準備のために大分聲を嗅らして居つて、十分音聲が達かないだらうと思ひますから、これから諸君の方へ出かけて行つて話をします。然しながら、長い話は斯ういふ野天で出来ませんから、先づ私のいま此處で話したいと思ふ大意を述べまして、追つてこの山上演説の筆記を世に發表するつもりでありますから、その時にあとは補ふことにします。

大體この義家朝臣の勿來の遺跡をば、斯の如く自分が顯彰しなければならぬといふ主意はどういふ所に在るか、といふ大要を話さぬといふと、私は義家公の遠孫に當つて居るから、自分のたゞさういふ緣故でやつたといふのみに解されては甚だ困る。こ

れは義家といふ人格を通して理想の日本人を讃歎し光揚するといふことが、この遺跡顯彰の主意であります（拍手）。

そもく日本といふ國は、此國を開かれた御先祖が 神武天皇である。神武天皇は御尊號の示すがごとく、『神聖なる武』の御徳を有たれた方としてある。今日世界一統に所謂「文化」といふことをさかんに唱へるがために、往々軍國主義とか、或は武斷の政治とかいふことをば、悪く言ふ様な風潮があります。それは人を壓倒してみづからの利をなさうといふやうな意味の「武」は、無論文化の敵であります。然し日本の 神武天皇の理想せられた「武」はさういふ武ではない、御稱號の示すが如く『神武』といふのは『神聖なる武』である。この神聖なる武といふのは何であるか、神聖なる武そのもの、裏面には『神聖なる文』といふものを含んで居るのである。神聖なる文を閉却した武は眞の武でない。日本は御先祖が 神武天皇であるから日本人は強い、みな武勇の民である。然しながら、その武勇といふものは、單に他を壓迫すると

ころの強さではない。

畢竟「武」といふものは、正義をまもるといふことに就いて入用なものである。人を殺すところのものではない。戦争は人を殺すけれども、夫はやむことを得ずして殺すのである。眞の武といふものは人を助けるのである。かるが故に武の内面には「あはれみ」といふものがなければならぬ。その仁慈の心の無い武は眞の武でない。たとひ人間が持つて居る武であつても、それは禽獸の武と一斑である（拍手）。

虎には爪がある、牙がある。狼には牙がある。牛にも角がある。斯やうな禽獸には、人間をおそれしめるほどの武器を持つて居る。これは彼等の武である。それはただ己れが食物を得ようがために、他を壓迫して、他を殘害して、さうして我が望みを達しようといふために、使ふところの武である。若し人間が單に利害の問題とか、己の領土を擴げるとか、己が國の商權や利權を保護するために他を壓迫するといふ、これまで永らくの間續いて居つた世界のあらゆる戦争のごとき事が人間の武であるな

らば、それは虎や狼の武と同じことである。神武天皇は絶対平和といふことを御主張になつた。又に断らずして天下を平げんと仰せられた、さういふ武である。それが日本の國の使命である。かるが故に其の文の中には武を含み、武の中には文を含んで居る。日本では人皇の世となつて神武天皇は武徳の御先祖であると同時に「久米舞」「久米歌」といふ様な日本最古の文藝はやはり神武天皇によつて建創せられた。其の優美なる文徳の上に發揮した武は、絶対平和の爲に働く武である。日本人の心はみな此の心でなければならぬ。「武門武士」といつて「さむらひ」といふものが別に何か一種の特別なる職業となつて誤れる國家の組織が、今日の國民に甚しき誤解を與へたけれども、元來日本は天皇陛下と人民との二階級より外にないのである（拍手）。たゞ其の人民の中で勳功のある者が華族とか貴族とかなつた、これはやはり人民である。

その 天皇と人民といふのはどういふ關係かといふと、この建國の精神即ち 天照

大神が、此日本を選ばれて地上に此一大文明國を建てられた。一番ふかく、一番高いところの文化をば地上に建てられた、それをば『天津日嗣』といふ。「日本書紀」には『天業』といつてある。その天業の内容は 神武天皇が是を三通りに説かれてある。『積慶』といひ『重暉』といひ『養正』といふ三つを以つて此日本の國を建てた三綱とせられてある。「積慶」とはもろくの道徳順序を積むことである。「重暉」とは天地人の三才を貫いたるところの人間の文化である、即ち知識である、それを重ねるといふ。その目的は何であるかといへば、正義を守るためである。正義といふものは何であるかといふと神の心だ、或は佛の心と言つてもよい。人間を平等に、みな悉く正しき道に入れようといふことの目的のために、如來や聖人も出た。然しながら如來や聖人はこれを或は思想となし、信仰となし、説明とはなした。けれども之を事實としたものは、國家の建設によつた正義でなければならぬ（拍手）。即ち日本はその正義を行ふために國といふものを拵へて、國といふもの、全部を正義にしたのである。だ

から日本といふ國は正義のかたまりである。その正義のかたまり、正義の結晶したのが日本といふ國だ。その國の心を傳へるのが國民でなければならぬ（拍手）。それをまもるのが 天皇陛下である。だからこの二階級しかない。この國は即ち『神武』を以つて君となす、人民もまた『神武』でなければならぬ、神聖な武でなければならぬ。それを武は軍人のやることであつて、吾々平民の關係のない事だと言ふならば大變な間違ひだ。農家は鋤を執つても、その鋤の中にこの武がなければならぬ（拍手）。商人は算盤を持つても、その算盤の中に正しき武がなければならぬ（拍手）。學者はペンを走らせる、そのペンの中にこの正しき武がなければならぬ（拍手）。その註文と違つたのは、即ち日本の本當の日本人ぢやない。本當の日本人は、この心をば自分々々の職業なり分限なりの上に顯すのが、眞の日本國民である。

ところが政治家がこの心を忘れたり、學者や教育家もこの心を忘れたり、實業家がこの心を忘れたりしてたゞ西洋人の糟粕を喰つて、あらゆる世界中で舐めつくしたか

すを善いことに考へて、その尻馬に乗つてたゞ彼等の眞似をして、折角かたく正しい日本の國風美を破壊して、己れと掘つた穴の中に墮ちることも知らないで「文化々々」と言つてみな穴の中に落つちて了ふ（笑聲、拍手）。

今日の世の中の有様を見るがいゝ。労働者は労働者でもつて、たゞ資本家と對抗して、争ふ事を以つて能事として居る。小作人は地主に對して、争ふ事を以つて能事とする。人民は、政府と争ふ事を以つて能事とする。議會の有様を見ても知れる。（拍手）議員同志でさへも年中喧嘩をして居る。わるく言へば打つたり叩いたりして居る。亂暴狼藉をして惡態を吐いたり打つたりする者は、昔から馬方か車力の喧嘩だと言つて居る（笑）。ところが一國の選良として集まつて、上 天皇の聖旨を奉じ、下國民の安危に關するところの重大なる國政を議するところの立派な大道場に於いて、罵詈雑言はあらかのここと、果ては殴り合をして負傷者までも出かすといふやうな、實に最劣等な風俗が今議會に公々然と行はれて打つたとか殴つたとか、癩が出来たとか負

傷をしたとか（笑）その跡始末でもつて幾日もくゝいるゝのことをやつて、懲罰會議だとか、打つたとか、打たないとか、そんなことで日を暮して居る。一國の模範たるべきところの最高議政の府に於いてすら、此通りであるといふことは、國家の全體が争ふことを以つて能事とするといふ反映である。即ち西洋の狀態と今私が言つた此反抗闘争の氣分を、宜い氣になつて引き入れた結果である（拍手）。といふのは日本は階級はあつても争ひといふものが無いのだ。階級があればあるほど世の中は整然とするのが日本の特色だ（拍手）。それを聞いた風に西洋人の眞似をして、たゞ何でも長者に向つて反抗しなへすれば、立派なことの様考へて居るといふ様な淺はかな風俗が、今日政治界といはず教育界といはず實業界といはず、滔々としてこの惡風が瀾漫して居るといふことは、みなこの日本の國體、國性を忘れたから來つたのである。この頃よく國家を改造するナンと言ふけれども、改造しなくても宜いのだ、改造ナシテ餘計なことだ。改造するナンと言ふことは生意氣千萬だ、回復するのだ。神武

天皇に還るのだ（拍手）。

神武天皇といふ天子は、世界に於て一番立派な武徳のあるところの君であると同じ時に、神の如き絶對の平和を地上に移し、此世界人類に向つて人間界の最上級の平和の福音を、二千五百有餘年の昔に宣言せられたのである。そのことをば日本の歴史家も政治家も今までボンヤリして居たぢやないか。己れの國を忘れ、己れの先祖を忘れ己れの天子を忘れ、己れを忘れて居つたのだ（拍手）。それだから日本の状態がこんなになるのだ。殆どさまの姿だ、之を見て慨憤せぬ奴は日本人ぢやない（拍手）。それで吾々はこの日本の國體、國性を十分に體顯し發揮したところの眞の日本人の模範を求めんければならぬ。それは何であるか、吾々は一個人々々すべてがあらゆる仕事、すなはち學問にも、教育にも、實業にも、ことごとく、この精神が行渡つて居らんければならぬのである。商人の算盤、農家の鋤の中にも、この神武天皇の精神が行渡つて居なければ日本人でないのである。

ところが今の日本はそれを忘れて了つて今日こんな病態になつて居る。これは議會許り責められない。學校でもつて生徒が校長や教師を打つといふ世の中ぢやないか。教はる者が教へる者を打つといふやうな世界ぢやないか。これは世の中の精神界の身代限りだ（拍手）。これは只事ではない、全く日本の眞の精神といふものを閑却した爲に斯うなつたのだ。然らば完全なる模範の國民に還らんければならぬ、即ち神武天皇の精神に立還つたところの國民を造り上げなければならぬ。改造ではない、回復である、復古である（拍手）。

そこで其の模範を求める場合に、古今の歴史に於いて一番完全な日本人らしい日本人が、この八幡太郎義家だ。殆ど源家累代の光榮を一身に築き上げたところの、この武勳赫々たる義家は、神武天皇を人民にした國民の模範的人格である。義家が春風三月、落花の天に凱旋の將軍としてこの勿來の關を通られて——其の當時は、此山に山櫻が一パイあつた。その春風に落る花を見て詠じたのが有名な『吹く風を勿來の

「關」のあの歌だ。それがツイ其の前までは奥羽の山野に於て懸軍長驅して安倍の一族を征討した、鬼神のごとき勇武の將軍と言はれた強い人だ。古往今來我が國の武將で義家くらの完全に強いと言はれた人はあまり無い。義経も強かつたけれども、一面に於ては猪武者と言はれた。けれども義家はその強さに於ても、眞に完全な武將と言はれた人である。その極めて強い義家の肚裏から斯ういふ優美な歌が出るといふ所を考へて見なければならぬ（拍手）。種のない手品は使へないぢやないか（笑）、強いといふ力をこの腕に持つて居たならば、此左の腕には何があるかと考へて見なければならぬ。それは義家の持つた武徳といふもの、底を流れて居るところの日本の文化の淵源たる忠孝の美性といふもの、即ち國體精神といふものが充實して居るから、それが發しては武となり、開いては文となり、この文武雙備の大人格が出来上つたのである。けれども義家だけが特別に偉いといふのではない、あらゆる國民は皆な義家の通りでなければならぬ（拍手）。

そこで私は此義家の人格を通して日本人の固有の國民性といふものをば、今に於て追懐して、その本に歸るところの準備をせんければならぬ。神武天皇に還ることが直ぐさま出来ないならば、先づ取敢ず義家までには還らんければならぬ、斯ういふのである。今日此の處に於いて吾々は東京の方面から大勢の人をつれて来て、さうして斯ういふ水一滴もない不自由な所にいろいな物を持つて来て、或は舞樂をやつたり儀式をしたり、櫻を植ゑ、碑を建てる、これは物好きでやつたんではない（拍手）。此の勿來の關と吾々は何等關係がない。義家は私の先祖であるけれども、先祖であるからと言つて一々こんな事をして居た日にはたまらない（笑）。それは自分が義家の子孫であるが故に、親分の竈を擔ぐやうな意味でやつたんではない（笑、拍手）。義家といふこの完全な人格、これこそ日本の模範國民であるからである。それからこの勿來の勝地が、今までは殆ど世に顧みられなかつたけれども、然し此處に来て見るといふと、一方には海を見、一方には遠山を見、如何にも風光明媚の地である。さうして古は此

處に櫻が非常にドツサリあつた。この「名所」に櫻といふ「名花」があつた。智仁勇兼備の「名將」が「吹く風を勿來の關」の「名歌」を詠んだ。彼の勇武鬼神を壓するほどの偉い強い人が、その金甲鐵腕の中から斯ういふやさしい歌を詠み得たといふことを主題として、一つの謎として考へて見なければならぬ。それは神武天皇が壓の神と仰がれたほどの強いお方であるに拘らず戦争のある毎に久米歌を作つて、久米部をして久米舞を舞はしめて、さうして軍民をお揃ひになつたといふこの優しい仁慈の御心ばへ、今に傳はつて居る久米舞の如き高雅優美な文藝、殆ど世界に於て最も古い整ふた文藝を有して居られた神武天皇は、敵が恐れて壓の神と言つたといふほど強いお方である。さういふ優しさを有して居るところの、文藝の母となるべき武が眞の武である。

仍つて先づ義家の性格から推してこれを考へたい。第一に義家は敬神の觀念が非常に強かつた人である。前九年後三年の役に於いて、その當時の所謂蝦夷といふものは

今のやうに開けたところではない、蠻族がこれに棲んで居つた。その蠻族の棲んで居つた蕃地に到つて皇化を布かうといふものには、單に弓矢の力ばかりを以つて壓倒すべきでないといふ考へから、日本の宗廟たる八幡大神をば戰地に悉く勸請した。五里ごとに一社を建て、勸請した。これを「五里八幡」といふ。今も各地に残つてゐる。懸軍長驅して敵地に入つて敵を鎮壓するのに、先づその宗廟の神を祀つて敬神の意義を知らしめるといふほど、即ち持久戦だ。斯ういふ仁慈の感化を及ぼして國民を指導しようといふ用意の周到綿密にして甚だ優しい、斯ういふところから鬼神の如き勇武も、自然にあらはれて來るのである。彼は鎮守府將軍として武將であると同時に、陸奥出羽守として政治家でもあつた。その政治には、人民が父母のごとく懐いた。その武勇には鬼神のごとく恐れた。その根源には、たゞ弓矢の道に長けて居つた、文藝に長じて居つたといふだけではない。神を敬ひ王を尊ぶ處の敬神尊王の大精神といふものが、土臺となつて居つた。それから發して來た文武である。であるから或る時 天



子が御病惱で、妖怪があつて 天子の御惱を増すといふ時に、宿直をして「源義家此に在り」と弦を鳴らしたら、その妖魔が退散したと傳へられて居る。其のくらゐ凝結した高尚な忠義の思想を有つて居つた人である。

先づ尊王家とか愛國家とか忠臣とかいふ類の人は、歴史上いくらもある。然しながら私の特に最も尊敬すべきことは、義家が前九年、後三年の兩役を果して美事に奥羽を平定して王化を布き了つて、この事を朝廷に申上げようといふので、敵將の首を持つて京都まで凱旋をして來た途中で、當時の廟堂の大臣が、彼を京都に入れるといふと、此の大なる勳功に對して多くの賞與を出さんければならない、なか／＼容易のことではない。之はモウ折角平定の功を奏して歸つて來たのだから、何とか理窟をつけ賞與を出さないやうなことにしようといふので、まアその當時の大藏大臣ともいふ様な者が、吝つたれた人間でもあつたと見えて、彼は政府の命に依つて戦争したものである、私闘である、私のたゞかひである。仍つて政府に於いては賞與するの限

りでないといふことを言つた。

諸君！ どうですか？ この幾年といふ永い間あらゆる艱難辛苦を経て、さうして朝敵を滅ぼし了つて奥羽の地を平定して歸つて來た。現代の戦争とはわけが違ふ。自動車に乗つて敵地へ走らして行く戦争とは、まるで違ふ。一通りならぬ悪戦苦闘を経て立派に美事に平定の功を奏した、その結果が何だといふと、「それは貴様達が勝手に戦つたのだから朝廷は知らない」と言つて京都へ入らない内に停めてしまつた。

今日の人間は賃銀が足りないと言つてストライキを起して會社に迫るとか、或は市役所へ押かけるとかする。その他の官衙などでも、此の頃は長者に反抗して、大勢で徒黨を組んでギシ／＼文句を言ふといふ事がある。今言ふ通り物を教はる身分の生徒がその教師に反抗して、甚だしきに至つては、その先生を寄つてたかつて打つて自分等の意思に従はしめるといふやうな亂暴狼藉、天地顛倒した今日の中これ考へて見たらどうだ。義家たる者が凱旋の途中で京都へ入つてはいけなと言はれ

て、大勢の何萬といふ將卒、それ／＼勳功を樹て、金鷄勳章でも貰つて立派に故郷に錦を飾らうといふ人間が、みな鼻を明されたといふ様な時に、その首領となつた義家が今の人間であつたらどうする？ 必ずや大なるストライキを起すであらう（拍手）。或は政府を攻撃するとか、大藏大臣の不信任を唱へるとかいふやうなことをやつて、ガア／＼大勢の力を以て「我が敵は本能寺に在り」でもやり兼ねない筈なのだ。こんなバカ／＼しい非條理の事はないのである。然るにも拘らず義家はこれを聞いて一言の不平等も言はずに、廟議すでに斯くのごとくんば敵將の首を京都へ持つて行つても何にもならぬからといつて途中へ厚く葬つて、さうして勳功のある將士を解散するに、朝廷からは一文の褒賞も出ないといふので、あらゆる自分の財産を抛つて、勳功のある人々をば私の財を以て公の勳功を賞して、一言も文句を言はずに自分は郷里に歸つた。朝廷を一言も怨まず當局者を一言も責めず、隠忍した。あれだけの強い人、あれだけの人望を得た人——朝廷の命は肯かなくとも將軍の命は必ず肯くと言

はれたほどの人望家であつた義家が、何等一言の苦情も葛藤も言はないで、枚を銜んで静かに故郷へ去つたといふ、この精神は何から出て居るか（拍手）。これが彼の五里毎に入幡の社を勸請して、さうして當時の蠻民を感化しようといふ深慮、その淵源は正しく國體精神から顯はれて居る。これが眞の武勇であり、これが本當の忠君愛國の標本だ（拍手）。

一旦緩急あれば義勇公に奉ずるといふことは、日本國民性の普遍的な特性である。然しながら、何事かあつて——ちやうど火事があつた時に平素持てないやうな重い物が持てるやうなもので、何かの事變の際に人間といふものは奮發する氣になるものである。死ぬことの嫌ひな奴でも、どうかしたはずみで惚れた女があれば、心中しようなどいふこともある。それでは心中する奴は一體死ぬことの大好きな奴かと思ふとさうではない。死ぬことは大嫌ひナンだけれども、或る感情に激したときには心理作用でさうなる。一時の激變に依つて人情がさういふ風になつたといふやうな、煙花の

音みたいな浮いた忠君愛國ではいけない。今の義家のやうに、武勳赫赫功名太陽のごとく輝いたといふ大得意の凱旋將軍が、途中でもつて「貴様勝手にやつたんだから入つて来るチ」と言はれて、不平を起さないのみならず、私の財産を盡してこの數萬の將士に朝廷に成り代つて賞與を與へて、一言たりとも褒賞を朝廷に求めず、怨みを言はずして、靜かにして世の太平をはかつたといふ、その餘風餘徳が後年源氏の命ならばいつでも一命を差出すといふ、この東國全體が源氏に人望の集まつた原因となつたのであるけれども、それはさういふ事を謀つてやつたのではない。斯うして置けば後世子孫が榮えるであらうからと云つて、樹を植ゑるやうな料簡でやつたものではない、天真爛漫眞の忠誠から現はれた。これが本當の日本人の朝廷に對し、國に對するところの眞の忠君愛國だ（拍手）。これを完全に顯はしたのが義家である。義家の徳はいろ／＼ある。ザツト算へても「敬神」といひ「誠忠」といひ「武勇」といひ、「仁慈」といひ、「寛宏」といひ「文雅」といひ「機略」といふこの七つは、義家は完全に備へ

て居る。斯のごとき性格こそ、義家の天稟のすぐれた性格から來つたと言ふべきであらうか、或は何か他に修養から來つたのであらうか。無論天稟もすぐれて居つたらうけれども、私はこの義家といふ人がまことに如法に國を思ひ、君に忠義を盡すといふその根源が、天然自然と國體精神として現はれた日本國民性といふもの、自然表示としての結果であると考へる（拍手）。

私は嘗て 明治天皇を「國體の權化」とお呼び申した。これに従へば我が先民源義家は「國性の權化」と謂ふべきである（拍手）。所謂忠孝の美しい華が、爛漫と性格の上に咲き出でた國性の權化である。たゞ武徳とか武勇とかいふことだけを以つて考へたのでは違ふ。

又これを武徳の旺盛な人として考へてもその所謂「武」は虎や狼が反對黨を壓迫する爲に、武器を有つて居るやうな意味と同一の武ではない。ナポレオンが想像し、秀吉が考へた様な武とは違ふのだ（拍手）。

神武天皇の武は天下を平定する爲の武である。正義をまもるための武である。慶を積み、暉を重ね、正を養ふ、この三綱を以つて日本の國は建てられたと仰せられた。この三綱が人類文化の出発点であつて、又到着点である。これ以上の文明はない。これが天照大神によつて授けられたところの至高至上の「王道」である。この王道を「天壤無窮」といふ。其天壤無窮の王道を護らせ給ふところの帝室を、天壤無窮の「寶祚」といふ。それは天皇陛下ばかりではない、帝室ばかりではない、この道を履み行つて御先祖の通りに國民性を發揮して、億兆心を一にして世々厥の美を濟す處の日本の國民も亦天壤無窮でなければならぬ。であるから神聖なる「武」即ち正義をまもるところの實行力、それが「武」である。その武を醇化して性格としたものが「忠孝」である。斯ういふ意味の武から現はれた忠孝でなければ眞の忠孝ではない。親孝行をしようと云つたつて、君に忠義をしようと云つたつて、祿を貰ふから君に忠義をつくす、養つて貰つたから報酬のために親に孝行をつくす……そんな打算的の忠孝はそ

れは支那の忠孝だ（拍手）。日本の忠孝はそんなものではない。よく新聞記者が、社會主義の者が跋扈する、その源は社會主義者も悪いだらうけれども、政府の官憲がむやみに壓迫するから、それで彼等の精神を激するのだと言ふそれはさういふ事もあるけれども、あつてもそれは間違つて居るのである。前年幸徳秋水の事件の時にやはりさういふ議論があつたから、自分はこれは捨て置けないと思つたから、「國民的反省」といふものを書いて數萬部天下に頒つて反省を促した。たとひ官憲がどうあらうとも、『朝廷が人民に壓迫を加へようとも、それは國民が彼れ此れ言ふべき所ではない。朝廷に若しさういふ悪い事があつたら、それは朝廷御自身に御先祖に對して濟まないのだ』（拍手）。人民はこれに對して彼れ是れ言ふべきものではない。人民は人民の道をまもつて立たなければならぬ。『君君ならずといへども、臣は以て臣ならずんばあるべからず』、『父父ならずといへども、子は以て子ならずんばあるべからず』、これが萬代不朽の道德だ。親父が間違つて居るから、ナーニ孝行な

どしなくとも宜いとか、況んや自分の演説に對して、巡查が無理に叱言を言つたからといつて、そこで反抗心を起して、それを以つて朝廷に累を及ぼさうナンといふ、こんな見當違ひな話は、世の中にない（拍手）。さういふやうなことを善いこととして、世の中に鼓吹するものも、一般思想界の誤りである（拍手）。

義家が、今申した通り朝廷の廟義が私の戦ひであると言つて之を擯斥したにも拘らず、一言の怨みも言はずに、私財を以つて國家に成り代つて勳功のある將士を賞與して、縁の下の力持をして、一言たりとも怨みもしなければ功をも誇らなかつたといふ、これが本當の日本國民である。打算的に、權利的に、今日の様に何でも權利々々と言つて人間を權利でもつて換算しようとして考へたのは、食物本位の思想である。食物本位の思想は禽獸の思想だ。禽獸は食物を漁るより外に何も仕事がない。人間も亦食物本位であるといふ彼のマルクスの主張するやうな議論は、人を驅つて禽獸たらしむるものである（拍手）。禽獸になつてそれで平氣で居るやうな、低級な墮落した國

民を何千萬有して居つても、國はすでに亡びて居るのである（拍手）。宜しくこの國の使命を體し、建國の精神に則つて、今の義家の性格を私が七つ算へた、「敬神」と「誠忠」と「武勇」と「仁慈」と「寛宏」と「文雅」と「機略」と、これが日本人のあらゆる階級を通じて、この七つの徳が現れて居らなければならぬ。

國民の精神は悉く皆「敬神崇祖」神を敬ひ祖先を崇めるといふ心から出發して居らんければ、どんな文明を有して居つてもそれはいも蟲の背中のきれいなものと同じこととで何の用にも立たぬ（笑、拍手「そんなことは誰でも知つてる」と評する者あり）。誰も知つて居つても誰も行はないから言ふのだ（拍手）。又誰でも知つてると言ふけれども、その「知つてる」に程度がある。先祖を敬ふといつたつて、何で先祖を敬ふのかどういふ譯で先祖を敬ふのかといふ事がわかつて居ない。だから「敬へく」と言はれたつて、上の空で敬ふばかりで徹底して居らぬ。「敬神」と言へば日本は神國であるといひながらそれが 天照大神なり 神武天皇なりを敬ふのを忘れて居る。まア日本の大都會とい

へば東京だ、日本を代表して居る大都會は東京である。その東京でツイ此の間まで神田の明神の祭禮に「神武天皇」の花車が出ると、その次から「熊坂長範」の花車が出た。諸君！ 神武天皇はこの國の御先祖だ、此國を建てた人だ、さうして今の絶對平和を以つて世界人類に臨まうといふ偉大な思想信仰を、人間界に發表なさつたところの人にして神なる御方だ（拍手）。その御先祖の 神武天皇の後から泥棒の熊坂長範の花車を引いて行つて、それでピーク／＼テン／＼とやつて居たんぢやないか（笑、拍手）。それをやつて居る者は解らぬからやつて居るのだらうが、大體神主がこれを平氣で見て居る。政府がこれを平氣で見て居る。教育家がこれを咎めない。泥棒と 神武天皇と一緒にしてそれで平氣で居るといふやうな低級な敬神だから、國がこんなになつたのだ（拍手）。出直した！ 出直した！！ 敬神も崇祖も皆んな出直した。忠孝も其通りだ。かびの生えた忠孝などを振り廻して、壓迫的にたゞ傳統的道德でやつて居るから、それだから西洋人からグズグズ言はれて、今のハイカラが「忠孝亡國論」なんて

下らぬ事を言ふのは、さういふ隙があるからだ。そんなかびの生えた忠孝ではいかぬ、そんな粗製濫造の敬神崇祖ではいかぬ、國體の精神から根の生えた本當の敬神崇祖でなければならぬ（拍手）。それは近く 源義家が活きた手本である。又武勇といふことも今言ふ通り、たゞ徒らに強いといふことが武勇ではない、それは蠻勇である。その「強い」といふことの裏面には必ず「優しい」といふことがなければならぬ。「武士」といふものゝ内容は、「情を知る」といふことに在る。この「情を知る」といふ心から出た強さでなければ本當の強さでない。彼の衣川の戦争で義家が安倍貞任を追ひ詰めた。義家の矢先に當つた者はモウ千人が千人助からないといふ位な強弓且つ弓術の名人だ。それが敵將を追ひ詰めて貞任をいよく一矢に射止めようといふ時に、あまり矢壺が美事であつたから餘裕があつた。そこで義家が貞任の背後からちやうど衣川の戦争であるから洒落て

「衣のたてはほころびにけり」

といふ即吟の歌を以てからかつた。奥州では城の砦のことを「館」といふ、衣川の館だから「衣のたてはほころびにけり」と下の句をやつた。すると貞任が餘裕のあつた所を見たから振り返つて義家に向つて

『年を経しいとのみだれの苦しさに』

と上の句をつけた。義家は今やウーンと満月の如く弓を引き絞つていよく矢頃はめてあつたに拘らず、あまりに美しい貞任の即答の名吟であつたから、さすがの義家もアツと言つて感じてその儘貞任を助けて放してしまつた。どうです？ 貞任のために永い間苦しんだのだ、貞任のために家の子郎黨もたくさん討死して居る。それほど強敵を今追ひ詰めて一矢に……といふ時に「衣のたてはほころびにけり」とやつたらば、彼もさる者、年を経しいとのみだれの苦しさに」とは附けも附けたら、いかに優にやさしい、その文雅の徳に免じて、はめた矢壺を外して命を助けたといふ。この物のあはれみの中に宿る武勇、これが眞の日本の神聖なる武である（拍手）。

それがこの勿來へ来てこの關を通るときに、

吹く風を勿來の關とおもへども

道も狭に散る山櫻かな

と詠まれた。今も此地に来て見れば斯く山水明媚の地である。これに古木の櫻を配し金甲鐵腕の名將が名馬に打ち跨がつて此關を通つて、折しも吹き來る風に花瓣が繽紛として散つたといふその風情、義家たらずといへども一種の感慨なかるべからざる所である。夫は歌よみが此處で歌を詠んだのならばなんでもない。武勇絶倫の名將が凱旋の功ををさめて此處を通る時に、日本の名花である所のこの櫻花に對してこの名吟を遣した。そもこの勿來の關といふのは、古へ蝦夷の敵がこれから南へ來るなどいふので、此隣國の常陸の國との境に設けられた。常陸の國は昔は「上國」といつて親王の任國になつて居つた。常陸の太守は臣下では出來ない、親王の任國となつて居つた。其くらゐ重要視された。これは國防の要關である。さうしてこれから北の奥州

の方には蝦夷が棲んで居つた。そこで此處に關を建て、永く國防の要關として、これから南へ来るなといふので「来る勿れ」と書いて「なこそ」と謂ふ。「勿來の關」、いふのは消極的の名前であるけれども、國防の眞義をあらはして居る。

日本の武は侵略の武ではない、正義をまもる武であるから、平生の構へは消極的でなければならぬ。國防的であつていゝ、一朝これに反抗する者があつた時には回天の威力を揮つて、世界を一呑みにしてもビクともしないといふ強さがある。たゞひやみに國さへあれば奪りに行かう、機會さへあれば利權を獲得しようといふ、まるで巾着切が電車の内でキヨロ／＼して居る様な、さういふ外交やさういふ軍事行動は、日本國民の最も愧づべき所である。「勿來」の二字は消極的の意味に武を構へて、眞の國防の意義をあらはして居る。

さうして今でも此處は風のよく吹くところだ。この風の吹くのは斯ういふ海岸の關係、山の關係で、私もこの間烈風の日に此處へ櫻を植ゑる番號を打ちに来てひどい目

に遭つた。昨日今日は幸ひに上天氣であるが、然し今日もモウ大分風が出て居る。とにかく風の名所だ。義家の時分だつて風は吹いたから、そこで

吹く風を勿來の關とおもへども

道も狹に散る山櫻かな

モウ蝦夷は平げてしまつたから來ない、風だけはせめて來てくれるなと思つて居るのに、こんなに花が散るといふ、この落花を惜んだ情の中に、どういふことを、藏して居るか。

私はこの風が日本の伊勢の神風であるならば、その神風に散らす櫻の花こそ、本當の日本國民の散らすべきところの花であるとおもふ（拍手）。若しこの風がウラル、アルタイから吹いて來る彼の赤い風であつたならば、そんな風の爲には一瓣の花をも散らさぬといふのが日本人の特性だ（拍手喝采）。今は種々の風が吹いて居る。亞米利加からも吹いて來る、西比利亞からも吹いて來る、支那からも吹いて來る。八方十方か



ら日本に向つて風が吹かうとして居る。かるが故にその風を防ぐには、單に奥州の一角に勿來の關を置かないで、日本國中のすべてに、日本人の腹の底にみな勿來の關を築かなければならぬ（拍手喝采）。さうして散るべくんば伊勢の神風に散らうとせんければならぬ。

「花は櫻木人は武士」といふことがある。

それは士農工商といふ四つある中で武士ぐらゐ偉いものはないと考へた時代の遺物であるが、然し天下皆兵 天子様は大元帥であるといふ今日の國家の組織から言へば日本國民の全體は武士でなければならぬ、みな武士である、即ち神聖なる武を精神とした人民である。それが一朝千戈を執れば千軍萬馬を恐れぬ、眞の勇武となつて現はれる。その武が平和にをさまつて居る時は、商人は算盤の上はその武をあらはし、農家は鋤鋤の上はその武をあらはす。尤も鋤鋤の上にはあらはすと言つても、鋤で人を打つて歩いては何にもならない、その精神だ。

「武」は正しいことだ、正しいことをまもるのが「武」である、よつて「正」といふ字を書いてそれに「戈」といふ字をかけると「武」といふ字になる。「正義」をば「干戈」を以て護るといふことが「武」ナンであるから、人を殺すのが武ではない。殺すのは正義に反抗するから殺すのである。その罪を殺すのであつて、その人を殺すのではない、それが眞の武である。その眞の武を以て立つて居るのが、日本の武だ、それが日本の心である。だから武の心でなければならぬ。そこで「敬神」、「誠忠」、「武勇」、ことごとくが義家のごとくでなければならぬ。

「文雅」も義家の如くでなければならぬ。歌や詩をば遊興娛樂のためにするといふ低級な文藝よりも、眞の國民性を謳ふところの自然の發揮としてあらはれた尊い文藝でなければならぬ。小説でも芝居でも日本の今日はただ西洋の糟粕を食つて、西洋人の眞似さへすればナンでも偉いものゝやうに思つて居る。さういふだらしない文藝によつて國民性は害されたのである。日本には固有の文藝がある（拍手）。それはその

文藝の源たる固有の國體精神があるからだ（拍手）。

この國體精神からあらはれた文藝、そこに根を有つた文藝でなければならぬ。すなはち義家の文雅はそれから出て居る。又義家の「機略」此義家の機略を基礎とした意味で、日本國民の經濟思想の模範をこゝに採らんければならぬ。又義家の「仁慈」寛宏、學を好み、士を愛する、これ等の特色が或は教育に或は學問に或は政治に、この義家の優れた七箇條の性格が、一般國民の宗教、思想、文藝、政治、經濟の上にあらはれて行かんければならぬ、あらはるべきはずのものである。國體精神の自覺に還り、國性開發の眞の心に住したならば、いやでも皆なさういふ風にならんければならぬのである。

その偉人の跡を顯彰する事は、單に過ぎ去つた八百年前の義家の徳を過去の讚歎したからと云つて何にもならぬ。國史を讚歎し、國史の美を讚美する事は、七百年経つても八百年経つてもそれが新しい現在の國民の血でなければならぬ。又未來永劫そ

れがますます延長し擴大して行くのでなければ、國史の美といふものは價値の無いものだ。又さうあつてこそ國民性の發展向上に資すべきものである。歴史は即ち人間の活きた血を以て書いた一つの詩である。この勿來に於いて日本の名花さくら、櫻花の國日本而して智勇兼備の名將義家の事蹟を追懐するとき、即ち武の國日本——それは神武の國日本である。神聖なる武を基礎とするといふ、少くとも我が日本國民の典型たり模範たる義家を今日の國民が追想してあつて義家のやうに、否、義家以上に成らんければならぬ。神武天皇に還ること能はずんば、せめては義家までには還つて、さうして眞の忠君愛國の精神を、あらゆる方面から發揮充實して、國運の挽回、國運の回復を祈る、これがこの勿來の遺跡に對する私の史蹟顯彰を興した所以の主意であります（拍手）。

吾々がわざわざこんな不便な所まで来てこんな仕事をするといふのは、ナニも名譽のためでもなければ利益のためでもない。莫大な金を使ひ莫大な努力をするといふこ

とは、是れみなこの國恩、君恩を謝したてまつるために、この歴史上の美蹟を彰はして、せめてこれが何等か國民性の向上になれば……といふ婆心によつて、茲にこの事業を興し、今日斯く多數の人々の賛同慶讃を得て、盛大にこの式を畢つた次第であります。

さうして今日特に舞樂「陪臚」を奏したといふのは、義家公が非常にこの「陪臚」が好きであつた。出陣の時にも凱旋の時にも必ず「陪臚」を奏せしめたといふ故事がありますから、そこで本社の人々に命じて特に此の處に於いて義家公在天の靈を慰めるために「陪臚」の一曲を奏して、今日の式を成じた譯であります。どうか當地の諸君はこの心を以つて、ますます日本の國民性をかためるやうに、教育家なり實業家なり、あらゆる方面に於いて向上あらんことを祈ります。

私ははじめて此地に來たときに、義家公の遺詠に有名な櫻の名所であるべきこの勿來の關址に櫻が無いから、どういふ譯かと聞いたところが、植ゑても皆が伐つてしま

ふのだといふ。何の爲に伐るのかといふと薪にするのだといふ、それは無慚な話だ。植ゑる人があるのに伐る人があるといふ事は甚だしい矛盾であるから、モウ植ゑた櫻は伐らぬやうにしようぢやないか、そこで私は慨然として此地に櫻を植ゑることをその時に考へたのである。さうして私は今や此處に櫻を植ゑた。此村の青年達も非常に此のことに力を盡された、地方の人々も此勿來の勝地をばこれから大いに殷んにしようといふ考へで、承はれば「勿來保勝會」といふものが、今度出來るさうである。恐らくは當縣の知事閣下もその總裁とか會長とかいふものになられて、この偉大なる名勝をば天下に鼓吹し宣傳して、さうしてこの勝地の湮滅を防ぐやうに、私の希望ではこの満山を櫻にして、この歴史上の古蹟を利用して、東京あたりの都人士が毎年櫻花の時分には臨時列車を出しても此地に集まつて來るほどに、満山を山櫻にして、人に清興の感を興ふると同時に、きよき國民性を勸發するところの精神教育大道場ともしたいと考へる（拍手）。

どうか當地の諸君はますますこの古蹟をばいりく々な方面から保護して、或は樹に、或は園に、或は道路に、天下の名勝たるに恥ぢざるやうに、進んでは國家のため、退いては當地方の古蹟を壯にし、美にする所以の任侠心の發露として、その保全に十分御努力あらん事を、幸ひ今日は長官閣下も御臨席であるから、知事さんの前で私は諸君にお願をして置く。

私はモウこれだけのことをしてしまつたら、別に此處に私が家を拵へる譯でもナンでもない。あとは諸君が此の山を嚴重に保護して、如何にも杖を曳いて見たくなる様に百人來たものが千人、千人のものが萬人に語り傳へて此地へ訪ねて來られるやうに、他郷から遊覽に來る人に便利を與へるやうな方法を講じて、この勝地と美蹟とをさかんに光揚せられんことを希望して已まない次第であります。(拍手大喝采)

思想國防の神髓

昭和十七年七月廿三日初版印刷  
昭和十七年七月廿八日發行

定價壹圓八拾錢  
(送料十五錢)

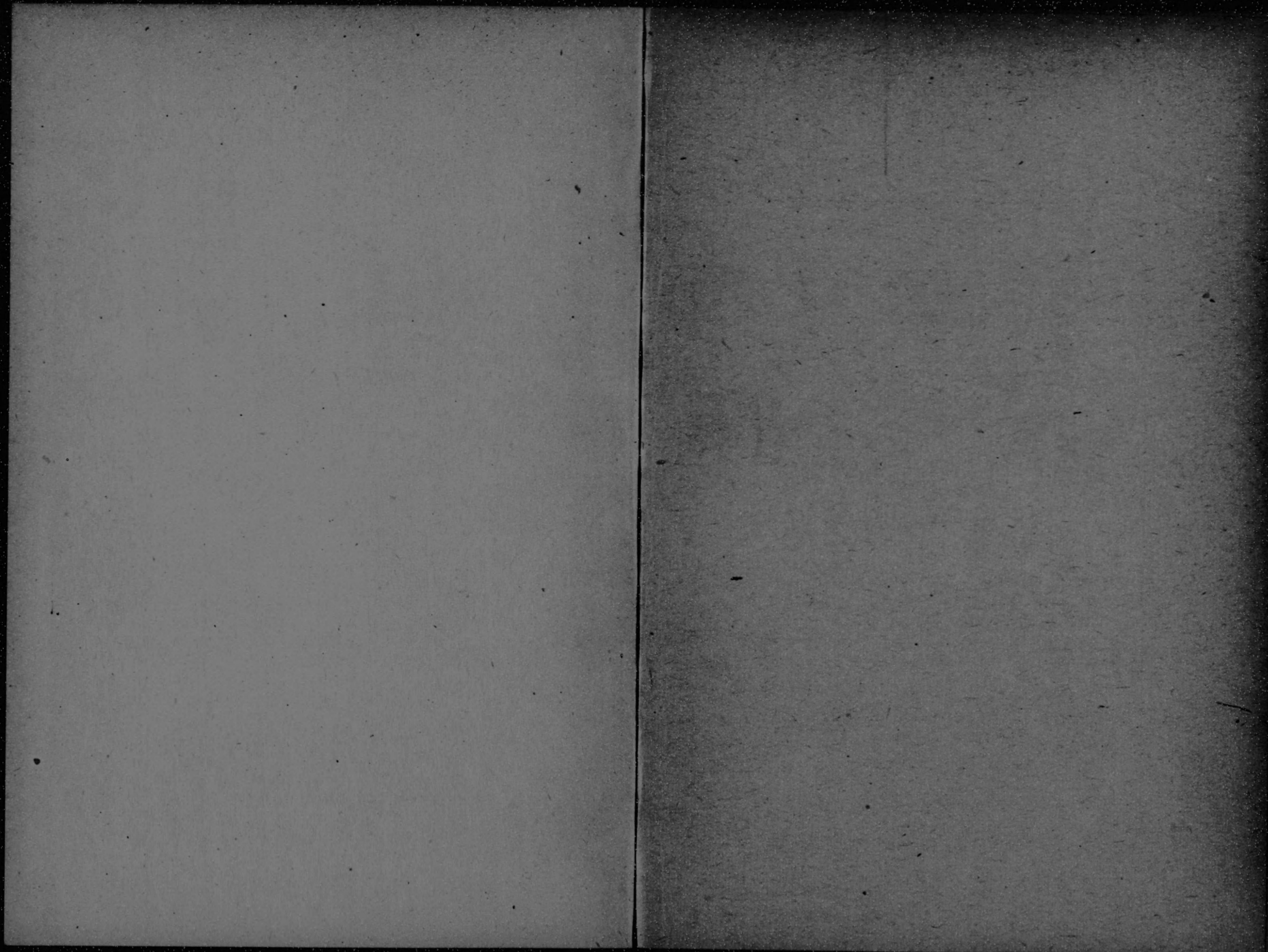
著者 田中智學  
發行者 鹿山實  
印刷者 寺井藤左工門  
配給元 日本出版配給株式會社  
東京市下谷區上野櫻木町一  
東京市牛込區櫻町七  
東京市神田區淡路町二ノ九

發行所

東京市下谷區上野櫻木町一

天業民報社

振替東京五三九九三  
(會員番號一九五〇五番)





107



東京 天業民報社 發行